読書感想文コンクール
個人多読・クラス多読表彰について

[読書感想文コンクール表彰]

第47回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。１年生からは204編、２年生からは195編、３年生からは12編、合計441編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員８名と国語科教員３名による審査・投票の結果、その中から４名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉をたたえたいと思います。また、惜しくも入選には至りませんでしたが、審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

最優秀賞（２名）

１Ｍ　北橋　良隆さん　　夜と霧の先にあるもの－「夜と霧」を読んで－「夜と霧」フランクル，ヴィクトール・Ｅ著
３Ｃ　原田　綾音さん　　他人の幸せと自分の幸せ　「鼻」芥川 龍之介著

優秀賞（２名）

２Ｓ　斎藤　琢磨さん　　本当の「気遣い」に必要なもの　「フラダン」古内 一絵著
２Ｓ　山口　陽香梨さん　緩やかな滑り台　「ライオンのおやつ」小川 糸著

佳作（氏名非公表希望の１名を含む 32 名）

１Ｍ　影山　和郷さん	１Ｍ　森脇　元輝さん	１Ｍ　山本　玲寧さん
１Ｅ　上林　諒太郎さん	１Ｅ　野口　一柾さん	１Ｅ　平川　結心さん
１Ｓ　岩﨑　史芳さん	１Ｓ　竹中　琉生さん	１Ｓ　田原　きよらさん
１Ｉ　窪田　夏記さん	１Ｉ　三原　瑚桜さん	１Ｃ　櫻井　萌夏さん
１Ｃ　中川　和奏さん	１Ｃ　西村　ひかりさん	１Ｃ　渡邉　周平さん
２Ｍ　小瀧　結季さん	２Ｍ　牧野　ゆいさん	２Ｅ　石原　春捺さん
２Ｅ　芝野　青凪さん	２Ｅ　堀井　雄大さん	２Ｉ　浦久保　拓人さん
２Ｉ　中谷　唯人さん	２Ｃ　岡井　優実さん	２Ｃ　久保　陽菜さん
２Ｃ　當城　優和さん	２Ｃ　中田　優翔さん	２Ｃ　濵田　明莉さん
３Ｍ　石田　眞子さん	３Ｍ　小原　みなもさん	３Ｉ　鄭　佳音さん
３Ｉ　升岡　瑞葉さん		

読書感想文コンクール表彰式

表彰式は１月５日（金）昼休みに校長室にて行われました。その模様は、図書館からのお知らせに掲載の読書感想文コンクール表彰式ページをご覧ください。

図書館からのお知らせ

（図書館からのお知らせhttps://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/information/ ）

[個人多読表彰]

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

第１位　物質化学工学科５年　山口　三佳さん
第２位　物質化学工学科４年　加納　凜太郎さん
第３位　物質化学工学科４年　中南　琢磨さん
第４位　電子制御工学科５年　阪本　靖大さん
第５位　電 気 工 学 科２年　木村　要一さん
第６位　物質化学工学科４年　野崎　凌平さん
第７位　物質化学工学科１年　岩川　一平さん
第８位　情 報 工 学 科３年　升岡　瑞葉さん
第９位　情 報 工 学 科５年　桝本　亮さん
第10位　　（氏名非公表）

［クラス多読表彰］

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。

第１位　物質化学工学科４年　（19.0冊／人）
第２位　システム創成工学専攻 情報システムコース２年　（13.5冊／人）
第３位　システム創成工学専攻 機械制御システムコース１年　（10.4冊／人）
第４位　情報工学科５年　（ 9.2冊／人）
第５位　物質化学工学科３年　（ 8.5冊／人）
第６位　電子制御工学科５年　（ 7.0冊／人）
参考：システム創成工学専攻 機械制御システムコース２年　（10.2冊／人）※
（※）専攻科のクラスが上位５位までに３クラス以上入っていた場合、専攻科は上位２クラスに制限し、本科から上位４クラス、合計６クラスとする

全クラスの貸出冊数は「奈良高専図書館　多読表彰ページ」をご参照ください。
https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/event/tadoku/

多読表彰ページ

令和５年度

読書感想文コンクールを終えて

《最優秀賞について》

１Ｍの北橋さんは、フランクルの『夜と霧』を取り上げています。本書は第二次世界大戦中のユダヤ人強制収容所で起こった悲劇の記録ですが、北橋さんの感想文が優れているのは、この出来事に対して「かわいそう」「気の毒だ」といった感情に溺れることなく、心理学者である著者の視点の意味を正しく把握した上で、「生きる」とはどういうことかという普遍的な問題意識に踏み込んだ点だと思います。北橋さんの感想には、経験のない者が悲劇の経験者と同じ認識を持つことは不可能だが、生きる意味を捉え直すことが両者の架け橋となり得るのではないか、という気付きがあります。「生きる」ことの意味について述べられた部分は自己省察であると同時に、グローバルな視野での考察にもなっています。本書のタイトルに関する解釈も説得力がありました。

本書の刊行から七十年以上が経過していますが、今なお混迷を極める世界情勢に対して我々はどう向き合ってゆけばよいのか、北橋さんの文章はそのことに対する自分なりの考え方を明確に示しています。

３Ｃの原田さんは、芥川龍之介の『鼻』を取り上げています。作品のテーマを的確に読み取り、言及すべき点を簡潔に示したまとまりの良い文章です。原田さんは、「他人の不幸は蜜の味」という人間の業、それが自分とも

無縁のものではないことを直視するという自省的な視点をまず設定し、幸・不幸は相対的なものであることを指摘します。さらにその感情に対する方策を自分なりに見いだそうとするプロセスが述べられています。口先で綺麗事を唱えたりむやみに大きな目標を掲げたりすることは意外と簡単なことですが、着実に今現在の自分に出来ることは何かを見つめようとする、等身大の筆者の現在がよく分かりました。ところで禅智内供の鼻が元に戻った後、彼は人々からもう笑われずに済んだのでしょうか。原田さんにはその解釈をさらに聞いてみたい気がしました。

《優秀賞について》

２Ｓの斎藤さんは古内一絵の『フラダン』を取り上げています。斎藤さんは読書を通じて学んだことを三点挙げていますが、そのうち二点は「言葉」というものの重要性に対する考察です。言葉というものは、一旦外に出してしまえば取り消すことはできません。それゆえに自分の思いを言葉にすることには誰にとってもためらいを感じる行為です。しかし敢えてそのハードルを乗り越えることで何か得られるものがあるのではないかという指摘が、登場人物の置かれた背景も視野に入れながら分かりやすく書かれていました。三点目の学びとして「無知の知」ということも挙げられていました。これらの学びはいずれも他者との真摯なコミュニケーションのあり方を考える上で非常に重要なことであり、斎藤さんにとって貴重な読書体験だったのではないかと思います。末尾の酔芙蓉という花の意味づけも良い読み方でした。

２Ｓの山口さんは小川糸『ライオンのおやつ』を取り上げています。十代の若者にとって死は日常から最も遠い事象でしょう。死は多くの人にとっても恐怖であり、死そのものを実感することは難しくとも、読書という行為を通じて死を前にした人間の視点を追体験し自分なりに咀嚼しようとする山口さんの姿勢が明確に読み取れます。過去の悔やまれる経験を上書して、なかったことにするのではなく、過去を振り返りつつ自身をねぎらうことが大事なのではないかとし、それゆえに主人公の最後の日々を「第二の人生の早送りのようだ」ととらえた感想が印象的でした。生死の境が曖昧になるシーンでは怖さも感じながら主人公の気持ちに自分を重ねるように読み進める態度も小説の読書ならではの体験だったのではないかと思います。

《全体について》

感想文の対象となる作品は特に制限を設けていないため、フィクション・ノンフィクションを問わず様々な分野のタイトルが集まりました。詩に挑戦してくれた学生もいました。こうした機会にこそ普段の読書範囲とは異なる分野の本にも挑戦してほしいと思います。高専ならではの科学ジャンルの本を選んだ学生も多くいましたが、その感想は概ね「新しい発見に目を啓かされた」という傾向に収まり、自分なりの問題意識につなげるようとする姿勢が希薄だったことが残念に思われました。小説を特に推奨するわけではありませんが、小説を読むことは取りも直さず他者と出会うことです。自分の知らない他人の人生や考え方を知り、自己観照的な視点を手に入れることは、小説を読むことでしか得られない体験かもしれません。たとえば今回「人間失格」を選んだ感想文が複数ありましたが、それぞれが異なる視点から登場人物の心情や行動を捉えたもので、同じ感想は二つとありませんでした。それを読んだ自分が他には代えがたい無二の存在だからこそ，様々な読み方が生まれるのだと思います。最初は、その作品や登場人物を好きか嫌いかというシンプルな感想を抱くだけでよいのだと思いますが、そこから一歩踏み込んで、なぜ好き（嫌い）なのか，何が自分の気持ちに引っかかっているのかを自らに問い直すことが、読書体験の醍醐味といえるのではないでしょうか。

今回も読書を通じて気付いた「生き方」について述べる感想文が多く寄せられました。生き方というと大仰な響きにも聞こえますが、それは結局のところ平生の自分をふり返る営みです。入選作もやはり生き方に言及したものですが、その文章は平易な表現で身構えずに説明されたものばかりで、決して言葉が上滑りすることもありません。それでいて感じたことがきちんと伝わる文章です。

候補作を絞る過程で、感想文の中で取り上げた問題の質には優劣は付けられません。拮抗している場合は文脈が整っていることを判断材料の一つとしますが、その意味で言いたいことがこちらに伝わらない文章は決して少なくありませんでした。語彙力・表現力は感想文を書くために身につけるものではなく、あらゆる場面でのコミュニケーションに必要なものです。自分の感じたことを適切な日本語で相手にわかりやすく伝える努力を怠らないでほしいと思います。

（国語・新井）